

府中市立 府中小学校・府中中学校“府中学園”

正会員	福	田	卓	司	君
正会員	小	泉		治	君
正会員	藤	田	雅	義	君
正会員	酒	井	夕	佳	君
正会員	長	澤		悟	君

提出書類で見た写真では四角な箱が連なった不思議な校舎の印象が強かったのだが、審査時間より少し早めに着いて校内を歩いていると、小学校、中学校それぞれの中庭のスペースは気分が安らぐとともに楽しい空間をつくりだしていることが感じられた。

この計画は市街地の中心部にある旧 JT 工場跡地と旧府中第二中学校敷地を利用した小学校4校と中学校1校の統合事業で、周辺の道路および地域施設を含んだものとなっている。校舎の計画では中庭を囲む形式（クワドラングル）を基本ユニットとして、小学校、中学校をそれぞれを組合せ、接続部にも中庭を配した平面になっている。この中庭を囲む校舎配置は9年間の旅と称する教育方針とよくマッチしているように感じられ、小学生の年少児童と中学生がつかず離れずお互いを見ながら成長していくちょうどよい距離を与えている。校舎は2階建ての特徴ある軒を持つ形態だが、これは府中の古民家の破風づくりのモチーフのようだ。その他にも白壁や黒格子など、まち並みの歴史性を外装などのデザインに取り入れている。冬至の太陽入射角よりややきつい角度の軒は冬期の太陽熱の利用と夏期の日よけを考慮して決定されている。このような環境配慮は計画のあらゆるところにおよび、エコスクールパイロット・モデル事業の認定校になっており、CASBEEのAランクとなっている。具体的にはパッシブな手法では太陽蓄熱のカウンターや自然換気のためのスウィンドウ付きの排気トップ、アクティブなものでは室内気流を起こすシーリングファンなど、いずれも十分にシミュレーションなどで検証しながら採用されている。また、採用されているシステムなど一部を除けば汎用品をうまく利用しているものなので、学校建築の費用面でも評価できる点である。インテリアデザインでは9年間の旅をモチーフにして教室のインテリアの色を日本の四季の変化に重ねて変えている。通常の均一な校舎空間に比べて楽しい雰囲気の変化を出していて、しかも和の色彩のせい、ありがちな違和感はまったくなかった。

航空写真で見ると、この学校の敷地がまちの中でいかに大きな割合を占めているかわかるが、この学校計画はまちづくりそのものとなっており、道路側に配置されてよく見える特別教室などは街路に表情を与える工夫をしている。地域施設としても開放される隣地の体育館・プールには、驚くことに公道の交差点をまたぐ屋根付き歩道橋（制振装置付き）までが設置されている。この学校を訪ねて感じたのは、いかにまちの人に愛されているかということで、美術室、工作室などの家具や機器などの多くが地元企業や個人からの寄付であり、敷地の植栽の手入はボランティアの人によって行われていることだ。環境に配慮した計画と設計者、学校、行政、まちの人のコラボレーションがうまく機能してまちづくりに貢献している。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。